

類書に引用された説文について

——『藝文類聚』を中心に——

伊藤美重子

1. はじめに

『説文解字』(以下、これを「説文」と略称する)は漢の許慎が西暦100年に撰して以来、字書の規範として、さまざまな変遷を経て、現在に伝わっている。現在、私たちが目にしている説文は宋の徐鉉の編纂した所謂「大徐本」である。この大徐本にも何種かの版本が存在し、説文のテキストを定めることにも様々な問題が存在する¹⁾。大徐本以前のテキストとしては徐鍇の『説文解字繫伝』即ち所謂「小徐本」があるが、小徐本は卷25が欠けており、完本ではない。原資料として現存する一番古いテキストは唐写本で木部と口部のほんの一部に過ぎない²⁾。

一方、説文は字書の範として様々な書物に引用され、引用文としての説文は多く存在している。この引用文としての説文を説文研究に活用できないだろうかという観点から、筆者は引用説文を収集するという作業を続けている³⁾。説文からの引用を特徴とする長孫訥言箋注本『切韻』残巻に引かれる説文の問題については、既に述べたことがあるが⁴⁾、本稿では類書に引用された説文の問題について考えてみたい。

現在、引用説文のデータの収集が完了している類書は、『藝文類聚』『初学記』『北堂書鈔』『太平御覽』⁵⁾であり、本稿では特に『藝文類聚』を中心に、類書における説文の問題を考えてみることにする。考察の観点として、次の3点を設定する。

- ・類書での説文の引用の仕方。
- ・引用説文と現行の『説文解字』即ち所謂「大徐本」との異同。
- ・類書間の引用の継承関係の有無。

2. 『藝文類聚』の説文の引用の仕方

周知のように『説文解字』は先ず、見出し字（親字）を小篆で示し、そのあとに、本義、文字構造（所謂「六書」）を記している。文字によっては、「賈侍中説…」「王育説…」という所謂「通人説」⁶⁾を引用したり、「一日……」「詩曰……」などという形で、別説、補説、用例を加える場合もあるが、たいていの文字は本義と文字構造だけの簡単な記述になっている。

『切韻』残巻、とくに長孫訥言箋注本での説文の引用は正字を示すためのものであり、そのため字形についての引用、文字構造を示す部分の引用が半数を占めていた⁷⁾。では類書である『藝文類聚』における説文の引用はどうであろうか。

『藝文類聚』は先ず、子目の最初にそれに関する第一の基本資料を引用していると考えられる。冒頭に引用される書について簡単な統計を取ってみると、その項目によって引用される書に傾向がみられるものの⁸⁾、コンスタントに引用されるのが『爾雅』(117件)、『説文』(53件)である。このほかに頻度の高い書として『尚書』(39件)『毛詩』(33件)『釈名』(30件)があるが、『爾雅』『説文』の頻度には及ばない。

『藝文類聚』の説文引用は全部で107件あり、子目の最初に引用されているのが53件、2番目に引用されているのが37件あり、引用例の8割以上が冒頭部で用いられていることがわかる。

項目の最初に字書が引用されるのは、まずその項目に関して、文字的な原義を求めるゆえであろう。ちなみに、『初学記』でも同じような統計をとってみると、数の多いものから『釈名』(46件)『説文』(34件)『爾雅』(22件)となり、『釈名』が多いのが『藝文類聚』と異なる点ではあるが、やはり『説文』が重視されていることがわかる。その引用をみると、文字構造の部分は省き、本義の部分だけの引用が大半で、文字構造も含めた引用例は10例にすぎない⁹⁾（なお『初学記』では24例、『北堂書鈔』では5例）。また、『切韻』『經典釈文』では、文字の発音を示すために、少数ではあるが、説文の反切を引く例が見られたが『藝文類聚』を始め、『初学記』『北堂書鈔』および『太平御覽』の

類書に引用された説文について

類書には見られない。

『藝文類聚』をはじめ類書での引用例で特に、特徴的な引用の仕方として、語の区別を明確にする目的で説文を引用する場合がある。一例をここにあげる。

「説文曰、除惡之祭曰禫、告事示福曰禱、道上之祭曰禡、絜意以享曰禋、以事類祭神曰禴、祭司命曰祉、祭豕先曰禩、月祭曰粹。」（卷 38 祭祀）

「禫」「粹」は現行説文には見出し字として載せられていないが、他はすべて示部一篇上に属する字で、比較のため、ここに大徐本での該当する部分の説解を並べてみる。説文見出し字の前の番号はお茶の水女子大学説文会による一篆一行本に基づく文字番号である¹⁰⁾（以下、現行説文の見出し字にはこの番号を用いる）。

「0054 禫、會福祭也。」

「0051 祼、告事求福也。」

「0065 禤、道上祭。」

「0029 禯、潔祀也。一日精意以享爲禋。」

「0033 禴、以事類祭天神。」

「0040 祉、以豚祠司命。」

一件の引用の中に 8 字即ち 8 例の説解が併記されるのである。羅列的引用のため、『藝文類聚』では説解と見出し字の位置が逆になる。現行説文との説解の異同については後述するとして、このような羅列的引用のためにおこる説解の変形は説解の異同を検討する場合に考慮にいれておく必要があろう¹¹⁾。

この併記する形での説文の引用は字の原義に戻って類別を明確にするのに、効果的である。このような引用の仕方は、『藝文類聚』では 12 件 48 例、『初学記』では 30 件 143 例、『北堂書鈔』では 14 件 31 例で、各類書の説文引用例の半数近くを占める。

類書での説文はその項目の文字的な原義を示すもの、つまり、字義の規範として引用されているといえる。

3. 引用説文と現行説文の異同の分類

では、その引用説文と現行の説文、即ち「大徐本」との異同について考えてみる。大徐本のテキストとしては、平津館本を底本とする一篆一行本を用いる。引用例と大徐本を照合して、引用例を次のような分類で整理してゆく。

「異同なし」とされる例には、次のような場合がある。

- a 本義、文字構造の記述を含めて全く同じ——完全に同じもの
- b 本義のみの引用で、異同なし——但し書体の違いによる異同、文末の「也」の有無、修飾関係を示す助詞「之」の有無は問わないこととする¹²⁾
- c 説解を一部省略して引用するが、引用部分についての語句の異同なし¹³⁾

「異同あり」には次の場合がある。

- d 引用部分の文字が異なる——これには次の三つの場合が考えられる
 - ① 文字は異なるが意味の上での差異がほとんどない（説文の羅列的引用のための表現上での変形もここに含める）¹⁴⁾
 - ② 文字も異なり意味も異なる
 - ③ 現行説文に見えない記述がある
- e 見出し字が異なるもの——これには次の二つの場合が考えられる
 - ① 該当文字が現行説文にはないが、引用文と同種の説解をもつ字があるもの
 - ② 該当文字が現行説文にはあるが、その引用文が別の字の説解と同種であり、見出し字が取り違えられていると推測されるもの
- f 該当文字が見出し字として現行説文にないもの——即ち、「佚字」

d-①は「ほぼ同」としてもよいような例で、それによってテキストの系統の違いを議論するには証拠不充分の例である。d-②からfの例でももちろん転写

類書に引用された説文について

の際のミスの可能性は排除できないが、それらは、大徐本以前のテキストについての手がかりになり得る例である。

4. 各類書の説文引用に関する統計

先の分類の a~c を「同」、d-①を「ほぼ同」、d-②~f を「不同」として、唐代の三種の類書について、引用説文の状況（引用例総数、大徐本との同不同、大徐本との一致率）についての簡単な統計表をここにあげておく¹⁵⁾。

	A 引用例 総数	B 同	C ほぼ同	C 不同	D 不明	一致率 (B÷A×100)
藝文類聚	144	51	16	74	3	35 %
北堂書鈔	63	30	6	26	1	48 %
初学記	230	103	28	98	1	45 %

上表のように唐代の類書では、引用説文の半数が現行説文と異なることが判明する。ちなみに一致率を「ほぼ同」まで含めて「(B+C) ÷ A×100」で計算すると、『藝文類聚』47%、『初学記』57%、『北堂書鈔』57%となる。『初学記』『北堂書鈔』の一致率がやや高いのは、現存のテキストでは現行説文によって引用説文の部分を訂正している可能性が高いことによると考えられる。とくに『北堂書鈔』は清代の刊本のため、校訂されている可能性が大である¹⁶⁾。校訂本すべてに言えることであるが、校訂者の手がどれだけ入っているかを見極めることは非常に難しい問題であるが、現状では校訂本を用いざるを得ない。

5. 現行説文と異なる例についての検討

引用説文が現行説文の記述と異なる場合、どちらが本来の説文であるかを断定するのは難しい問題である。その文献が説文と別の字書を取り違えているのではないかという疑惑は常に存在している。もし、いくつかの文献に同じ引用説文が引かれていたら、それが孫引きでない限りは、やはり、それは説文の説解であったと考えるのが自然であろう。ここでは、そのような例をいくつか紹

介してみる。

先ず、『藝文類聚』の引用例をあげ、『北堂書鈔』『初学記』『太平御覽』の類書に同じく説文からの引用が見える場合その例を次にあげる。それから次に大徐本の説解をあげ、更に参考として段玉裁『説文解字注』（以下、これを「段注」という）の説解もあげておく。段注には葉数を記す。類書の引用例は「説文曰」以下を記してある。

① 「蒻、蒲子也。可爲薦。」（卷 69 薦蓆）

「蒻、蒲子也。可以爲薦。」（『太平御覽』卷 709 薦蓆）

「蒻、蒲子也。以爲平席。世謂蒲蒻。」（『太平御覽』卷 999 蒲）

「蒲子。可以爲平席。」（1 下・0315 蕿）

「蒲子。可㠭爲平席。世謂蒲蒻。」（14 a）

② 「蔴、菰也。」（卷 82 菰）

「蔴、菰也。彫胡一名蔴。」（『太平御覽』卷 999 菰）

「菰蔴也。」（1 下・0452 蔴）

「菰也。」（30 b）

③ 「吟、歎也。」（卷 19 吟）

「吟、歎也。」（『太平御覽』卷 392 吟）

「呻也。」（2 上・0887 吟）

「呻也。」（25 a）

④ 「箭、矢竹也。」（卷 89 竹）

「箭、矢也。」（『初学記』卷 22 箭）

「箭、矢竹也。」（『太平御覽』卷 963 箭竹）

「矢也。」（5 上・2750 箭）

「矢竹也。」（1 a）

⑤ 「楊、蒲柳也¹⁷⁾。從木易聲。」（卷 89 楊柳）

「楊、蒲柳也。從木易聲。」（『初学記』卷 28 柳）

「蒲柳也。從木易聲。」（『太平御覽』卷 957 楊柳下）

類書に引用された説文について

「木也。从木易聲。」(6 上・3375 楊)

「蒲柳也。從木易聲。」(14 b)

①の例は「薦」と「平席」の字の違いである。『太平御覽』には二ヶ所に見え、卷709は『藝文類聚』とほぼ同じで、卷999は「也」と「可」の有無を除けば段注と同じである。段注は『太平御覽』卷999に引く説文によって現行説文に見えない「世謂蒲蕘」の四字を書き加えている。段氏は「平席」を「蒲萃(若い蒲で作ったしきもの)」と解釈する。説文では「薦(10上・5967)」は「獸之所食」であり、「席(しきもの)」という意味ない。唐代では「薦」は「席」の意で用いられる語であるため、『藝文類聚』所引の説文の説解になんの不自然さも感じなかつたのではなかろうか¹⁸⁾。『太平御覽』の二ヶ所の引用が異なることから、御覽に引く説文は先行の類書からの転引ではないかという疑惑をもたせる例である。

②は段注に「各本作菰蔣也。此蔣菰也之誤倒耳。今依御覽正。」とあり、段氏は『太平御覽』に引く説文によって説解を訂正している。御覽に引く説文は更に「彫胡一名蔣」とあるが、これは「菰(1下・0453)」の説解を併記したものである¹⁹⁾。段氏は引用説文によって説解を書き替えることがある。

③は「吟、歎也」と「吟、呻也」の二通りの解釈があったと思わせる例である。段氏は「呻、吟也(2上・0886)」とあるのと転注(互訓)と考えたのであろう。しかし、「歎、吟也。(8下・5310)」とあり、これと転注と考えてもよい。沈涛『説文古本攷』は『藝文類聚』『太平御覽』の引用説文に「吟、歎也。」とあることと、『廣韻』に「吟、歎也。説文云呻吟也。」とあることにかんがみて、古本説文には「吟、呻吟也。一曰歎也。」とあったのではないかと推測している。

④は段氏が『藝文類聚』によって「竹」の字を補った例である。段氏は『方言』卷9「箭自關而東謂之矢、江淮之間謂之錛、關西曰箭」の郭璞注に「箭者竹名、因以爲號。」とあると述べる。『初學記』が現行説文と同じなのは、誤って書き落としたと考えたほうがよさそうである。

⑤は大徐本のみ異なる例である。段注に「各本作木也。二字、今依藝文類聚、初学記、本艸圖經、太平御覽所引正。釋木云楊蒲柳、許所本也。」とあり、段氏は引用説文によって説解を訂正し、その根拠として『爾雅』釈木をあげている。段氏は引用説文と現行説文を検討して、異同がある場合その根拠を探し、根拠のある場合は、説解を訂正するのである。この引用例は『藝文類聚』『初学記』『太平御覽』とも楊柳の類の字を羅列する形の引用で、三種の類書とも「楊」の後に「檉、河柳也。從木聖聲。柳、小楊也。從木卯聲。」とある。文字構造も含めた引用が三種とも同じであることに、類書間の継承関係をうかがわせる。

次にもう少し複雑な例をあげる。

① 「宗廟之木主、名曰祐。」(卷38 宗廟)

「宗廟之木主、名曰祐。」(『初学記』卷13 宗廟)

「又祐、宗廟主也。禮郊宗石室。一曰大夫以石爲主。從示從石。石亦聲也。」

(『太平御覽』卷531 神主)

「宗廟主也。周禮有郊宗石室。一曰大夫以石爲主。」(1上・0039 祐)

「宗廟主也。周禮有郊宗石室。一曰大夫㠭石爲主。」(8b)

② 「薺草可食也」(卷82 薺)

「薺草可食。詩曰誰謂荼苦、其甘如薺。」(『太平御覽』卷980 薺)

「疾黎也²⁰⁾。从艸齊聲。詩曰牆有薺。」(1下・0382 薺)

「疾黎也。从艸齊聲。詩曰牆有薺。」(22a)

③ 「牽、七月生羊也。」(卷94 羊)

「牽、七月生羔也。」(『初学記』卷29 羊)

「牽、七月生羊也。」(『太平御覽』卷902 羊)

「小羊也。」(4上・2238 牽)

「小羊也。」(33a)

④ 「兕、如野牛。青皮堅厚、可以爲鎧。嶧冢之山、其獸多兕。」(卷95 兕)

「兕、如野牛。青毛。其皮堅厚、可爲鎧。嶧冢之上、其獸多兕。」

類書に引用された説文について

(『太平御覧』卷 890 兜)

「如野牛而青。象形。」(9 下・5846 鳴、重文兜)

「如野牛青色。其皮堅厚、可制鎧。」(43 b)

①の『藝文類聚』『初学記』での引用例は説文の説解の併記による変形があるとすれば、その説文は「祐、宗廟之木主也。」となる。大徐も段注もただ「宗廟主也」としている。また『太平御覧』は大徐に近い。段注によれば、「主(位牌)」は皆「木主」であったという。段注に「藝文類聚引作、宗廟之木主曰祐。」とあるが、説解を直すには至らない。ここは許慎説文に「宗廟之木主也」とあったとしても不自然ではなく、許慎は「木主」であるのに、「祐」の字が「石に从う」ことについて「周禮有郊宗石室。一曰大夫以石爲主」という説を加えたという考え方もできよう。

②は引用説文と現行説文がまったく異なる例である。「蕷」に「蒺藜(はまびし)」と「食べられる草」という二通りの解釈があるということである。御覧に引く詩と大徐・段注の詩の違いもこの解釈によるものである。「誰謂荼苦、其甘如蕷」は『詩經』邶風「谷風」の一句であり、「牆有蕷」は鄘風の詩である。「牆有蕷」は唐石經本、十三經注疏本とも「牆有茨」となっている。『廣韻』上平声 6 脂に「蕷、蒺藜。詩作茨。説文又作蕷。」とあり次に「蕷、上同。又才禮切。」とあることから、詩の「茨」は「蒺藜」の意の「蕷」と同じであり、それは説文でいえば「蕷」であることがわかる。又切の「才禮切」は上声 11 蕤の「蕷」の反切でその意味は「甘菜」とある。読み方によって意味が違うのである。大徐は「疾咨切又徂礼切」と二つの読み方を記すが、段氏は「疾咨切」(即ち脂韻)のみを記す。「蒺藜」の意味の「蕷」は「茨」にとってかわられ、「蕷」といえば食べるほうの「蕷菜」を指すようになったと考えられよう。小徐は「蕷」について「此今藥家所用蒺藜也。今人以此字爲蕷菜。」という。『説文古本攷』は古本説文では「蕷艸可食。一曰蒺藜也。」とあったろうと述べる。

③は先の「楊」の例と同じく三種の類書での引用の仕方が共通する例であ

る。『藝文類聚』でのこの例の全文をあげると、「說文曰羊祥也。象四足角尾之形。孔子曰、牛羊之字以形舉。畔、羊鳴也。羔、羊子也。羖、五月生羔也。羶、六月生羊也。羣、七月生羊也。羝、羊未卒歲也。」とある。『初學記』『太平御覽』はこの後にも「羊」に関する說文からの引用が続くが、月齢ごとの羊の呼び方については、「六月生羊」を『初學記』『太平御覽』では「六月生羔」とするのだけの違いで、ほとんど同じ記述である。段氏は『初學記』『藝文類聚』に「七月生羊」とあるのが陸德明及び孔穎達（即ち、『詩』「生民」の釈文及び正義）の拠った說文と違うので、信じがたいと述べる²¹⁾。類書の中の說文と經書の注疏類に見る說文とに異同があれば、段氏は經書系にしたがう。

④は「皮堅厚、可以爲鎧」「蟠豕之山、其獸多兕」の二つの事項にあたる部分が現行說文に見えない例である。段注は現行說文を書きかえたことについて、「青色各本作而青。其皮堅厚可制鎧、各本無此七字、今補。論語季氏疏、爾雅釋獸疏、詩何草不黃正義、春秋左傳宣二年正義、皆有此七字。」と述べるが、『藝文類聚』『太平御覽』の引用には言及せず、「蟠豕之山、其獸多兕」は加えていない。

以上の引用例でわかるように、類書系の引用說文には共通するものがある。その異同が、それが見た說文の系統によるのか、先行類書からの轉引によるもののかの判断は實際問題として難しいところである。段氏はこの問題の解決策として、類書系の引用說文を經書系の引用說文によって点検補強しているのである。

次に見出し字の異同について若干の例をあげて、そこからどんな問題が導き出されるか考えてみる。見出し字を取り違えていると推測される例（先の分類ではe-②にあたる）をあげる²²⁾。先ず、『藝文類聚』での引用例、次に取り違えられていると推測される二つの字の説解をあげる。

① 「曉、日白也。」（卷1日）

「明也。」（7上・4097 晓）

「日之白也。」（7下・4726 晓）

②「帝籍千畝者、使民如借。故謂之籍。」(卷 39 稽田)

「簿書也。」(5 上・2770 稽)

「帝籍千畝也。古者使民如借。故謂之籍。」(4 下・2706 稽)

③「舫、併船也」(卷 71 舟)

「船師也。明堂月令曰、舫人習水者。」(8 下・5209 舫)

「併船也。」(8 下・5212 方)

見出し字を取り違えるということは、その二つの字の区別があいまいになつているということである。或いは、異体字と考えているのかもしれない。①の「曉」は「曉」の異体字と考えられていたのではなかろうか。長孫訥言箋注本『切韻』残巻でも「曉」は「曉」の異体字とされていた²³⁾。②は『初学記』(卷 14 稽田)『太平御覽』(卷 537 稽田)にも引用がみえ²⁴⁾、ともに「籍」とあるが御覽は「從耒昔聲」と続いている。「籍」も「耤」も同じと考えているのであろう。③はその字が本来の字義、即ち本義で使われなくなり、その本義を別の字が担うことになったということである。「方」は「方向」の「方」が本義として認知されたため、本来の「併船(船を並べる)」という意味では「舟」のつく「舫」を用いるのが一般となつていったことを示している。このように、見出し字の異同から、当時の文字の状況がうかがえるのである。

見出し字の異同に関するもう一つ、先の分類の「e-①」の例について考えてみる。説文の見出し字は「小篆」という書体で記されるが、文字構造の記述によってそれを楷書体に直すと正字体ができるのであるが、その正字体を通り越して通行書体で文字を考えていることがわかる例である。つまり、この類の引用例から、その文字については、もはや本来の正字が忘れ去られ通行書体に取って代わられたことがわかる。

この類の例は 8 例あり、ここにその文字を列挙する。まず『藝文類聚』での書体、次に()内に説文の文字番号と該当文字を記す。

卷 1 日「翌(7 上・4080 晁)」、卷 18 老「耄(8 上・5149 耆)」、卷 38 辟雍「雍(9 下・5654 雰)」、卷 40 謐「謚(3 上・1644 謚)」、卷 43 歌「謠(3 上・

1474 燭)」、卷82 苔「苔(1下・0472 落)」、卷92 鶩「鶩(11下・7330 燕)」、
卷94 羊「暭(4上・2234 壴)」

最後に、先の分類の「f 佚字」に関して、他の類書にも見えるものをここにあげておく。このような例は、類書の継承関係を考える資料ともなる例である。

① 「月祭日辟。」(卷38 祭祀)

「月祭日辟。」(『初学記』卷13 祭祀)

② 「祭豕先日禱。」(卷38 祭祀)

「祭豕先爲禱。」(『初学記』卷13 祭祀)

③ 「鵠知太歲之所在。」(卷92 鵠)

「鵠知太歲之所在。象文。從佳昔聲²⁵⁾。」(『初学記』卷30 鵠)

「鵠知太歲之所在。」(『太平御覽』卷921 鵠)

6. むすび

以上、類書、特に『藝文類聚』を中心にして、引用説文の問題を検討してきた。類書での説文はその項目の文字の本義を示すものとして引用され、説文の羅列的引用の仕方により事物の類別を明確にしている。その引用説文は大半が現行説文と異なるもので、その異同の検討は現行説文を訂正し得るものである。しかしながら、類書の引用説文は先行類書の転引ということも考慮に入れ、より多くのデータとの照合を経る必要がある。

また、人々がその当時の目で、その当時の『説文解字』という字書を目にしていることを考えると、説文引用例には、各文献当時の文字の状況が反映されるといえよう。引用説文の検討は『説文解字』という字書のテキストの系統についての情報を提供するのみならず、当時の文字の状況を知る手がかりともなり得るのである。

(付記) 本稿は平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)「漢字字書

北京缸瓦市教会と宝广林

研究の基礎としての『説文解字』受容史研究（課題番号：12610467）による研究成果の一部である。

注

- 1) 説文のテキストの問題については、倉石武四郎「清朝小学史話（一）」（『倉石武四郎著作集』卷2所収）、頼惟勤監修『説文入門』（大修館 1983）、周祖謨「説文解字之伝本」（『国学季刊』第5卷第1号、民24）参照。
- 2) 木部は188字、口部は碎片2葉が別々に存在し、12字と6字が残っているにすぎない。唐写本説文については、莫友芝『唐写本説文解字木部箋異』、周祖謨「唐本説文与旧音」（『問学集』所収）、「閔与唐本説文的真偽問題」（『中国語文』1957,5）、『書道研究』1988年4月号、倉田淳之助「説文展観餘録」（『東方学報（京都）』第10冊第1分、昭14）参照。
- 3) この作業の基本的考え方は拙稿「『説文解字』佚文研究序説」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』第54巻、2001）参照。
- 4) 拙稿「長孫訥言箋注『切韻』残巻初探——切韻の中の説文」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第17号、1998）「長孫訥言箋注本『切韻』の説文引用例について——S 2055, P 3693を例として」（『お茶の水女子大学人文科学紀要』第52号、1999）参照。
- 5) データ収集の底本として用いた書は『藝文類聚』（上海古籍出版社校点本、1982新1版）、『初学記』（中華書局校点本、1980成都第2次印刷）、『北堂書鈔』（台北、文海出版社用光緒14年刊本影印本、民55）、『太平御覽』（台北、国泰文化事業有限公司用金澤文庫所蔵宋刊本影印本、民69）である。
- 6) 馬宗霍『説文解字引通人説攷』（北京科学出版社、1959）参照。
- 7) 注4参照。
- 8) 例えば、帝王部の子目では、各代の歴史書が冒頭にあがり、山部では『山海經』があがるなど。
- 9) その文字をあげと、2233 羊（卷94羊）、2869 笠（卷44笠）、3175 矢（卷60箭）、3375 榻、3376 樺、3377 柳（以上、卷89楊柳）、3633 橄（卷58橄）、4029 日（卷1日）、6093 鼠（卷95鼠）、6943 潤（卷9潤）の10例である。

- 10) お茶の水女子大学説文会編『加番説文解字』(編者印、1991) 参照。
- 11) 『藝文類聚』の「說文曰、樹果曰園、樹菜曰圃」(卷65園)に対し、大徐本では「園、所以樹果也。(6下、3772)」と「圃、穜菜曰圃。(6上、3773)」とあり、『藝文類聚』の引用の仕方は併記するために、形をそろえた可能性もうかがえる。或いは現行説文のほうが誤っている可能性もあるが。
- 12) ここでいう書体の異同とは、「艸」と「草」、「网」と「網」のような、本字、通行字の違いである。「之」の有無とは例えば「道上之祭」と「道上祭」を同じと判定する類である。
- 13) 引用説文が現行説文の説解の一部しか引用しない場合、それが省略して引用したものか、もともとその部分しかなかったのかという判定は困難であるので、ここでは、残存部分に異同なしと考えて置くしかないのでこのように処理した。
- 14) 引用説文は「芋」について「說文曰齊人爲芋」(卷87芋)とあり、大徐本では「齊謂芋爲芋」とあるような場合、一字一句そのままの引用でなく内容をかいつまんで引用したものと判断する。また、「柿」の引用例は「赤實菓也」(卷86柿)とあり、大徐本では「赤實果」、「櫛」の引用例「梳枇總名也」(卷70梳枇)に対する大徐本「梳比之總名也」のような場合で、文字は異なるがこれを「不同」とするには足りないものもここに分類する。羅列による引用文の変形については注11参照。
- 15) 引用例の数値は該当する見出し字の総数を挙げたものである。「不明」とは該当する見出し字が判定できないものや類書自体に闕文があるものである。一致率は小数点以下を四捨五入した。
- 16) 底本については注5参照。
- 17) 上海古籍校点本『藝文類聚』では、「薄柳」とするが、文淵閣四庫全書本では「蒲柳」とあり、上海古籍本の誤植であると判断して、四庫本に従った。
- 18) 『廣韻』(去声32霰)では「薦、薦席」とある。
- 19) 段氏は大徐本の「菰」に「雕菰一名蔣」とある説解を御覽によって「雕胡一名蔣」と書きかえている。なお、「菰」と「菰」は通用される。
- 20) 一篆一行本はこれを「蒺梨」とするが四部備要所収『説文解字真本』では

北京缸瓦市教会と宝广林

- 「疾黎」とあり、それに従った。なお、「黎」「藜」「𦵹」は通用される。
- 21) 段注に「初學記引牽七月生羔也。藝文類聚引七月生羊也。與陸德明、孔穎達所據不同。似未可信。」とある。なお、十三經注疏本「生民」の「先生如達」の「達」が「牽」であることについては段注に詳しい。
 - 22) これを見出し字の取り違えとみるか書き間違いとみるかは問題であるが、底本の記述を信することとする。この類の例は計6例ある。他は「6133 眇（巻1日）と 4047 呴」「1399 博（巻74 博）と 2885 簿」「6101 騃（巻95 鼠）と 6095 騃」である。
 - 23) P 3693（上声27 篓）「曉、呼鳥切。一。說文從白。」とある。
 - 24) 『初學記』は「籍田者、天子躬耕、使民如借。故謂之籍。」とあり、説解部に異同がある。
 - 25) 「從佳昔聲」の「佳」は「隹」の誤りである可能性が高い。